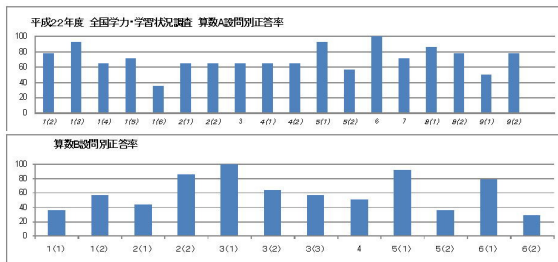


ラスの心をもち友達の一言で傷つき、学校へ来にくくなってしまいう児童もいる。相手を思いやりながらも、自己の意思をはっきりと伝える方法を教える必要があった。教員の働きかけで互いが気持ちよく過ごすには、どんな言い方をすればいいのかについて、互いに意識するようになった。

・授業の改善

テーマ「言語活動を効果的に取り入れた授業の在り方」



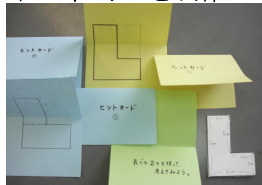
全国学力・学習状況調査の算数Aでは、加法と乗法の混合した整数の計算問題1(6)、台形の面積5(2)を求める問題の正答率が低く、計算の仕方や面積を求める公式が定着していなかった。計算の反復練習を行うことで克服していった。算数Bは、本校の平均正答率は全国平均正答率より高く、算数の活用する力が優れていると考えられる。その中で、設問5(2)6(2)のように数学的な思考を働かせ、記述式で解答していくことの正答率がかなり低い。そこで、算数科の授業の中で、第6学年では数学的な思考を表現すること、第4学年では課題について自力解決した内容を友達に伝えることを取り入れ授業公開した。

○研究発表会での授業公開

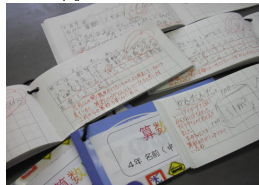
【第4学年「面積」】

課題 「長靴の面積の求め方をたくさん見つけよう」

自力解決した内容をペアや4、5人グループに伝え、考えを明確にしていく。



【ヒントカード】



【算数日記】

自力解決するとき、自力で導き出せるように9枚（1枚は、その場で書き込んで渡せるように白紙）の個に応じたヒントカードを用意しておいた。机間指導しながら、個別に渡す。また、算数の授業の終末には算数日記として一言感想を書く時間を確保している。自分がどのように考え、何が分かって何が分からないのか明確にするためである。学習の振り返りをするとともに、学級の中で紹介されることで学習意欲を

育て、自信をもたせる。

【6学年 算数「ハノイの塔」】

課題「カメ吉親子のお引越し」  
親ガメから子ガメの順に重なったカメの親子。ある池から別の池へ引っ越しさせる。

児童の実態に合わせ、興味を高める場の設定、教材や提示の工夫で算数の授業への意欲付けができる。自分なりに考えをもって解決するようにヒントカードを用意するとともに、算数日記を授業の終末に記入する時間を確保する。

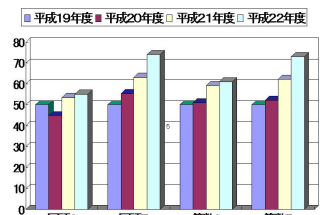


手作り教材：カメの親子のパズルと池の絵のカード



(3) 成果について

○本校の全国学力・学習状況調査の推移は、昨年同様に伸びを示し、特に国語Bや算数Bは10ポイント伸びている。算数Bは全国平均を上回り、年度末の再調査では国語Aと算数Aも全国平均を1.5～2ポイント超えた。児童質問紙の学校のきまりを守る、あいさつをするなどの規範意識や自分の将来に希望をもち自分を肯定する感情も全国平均と大差ない。基本的な生活習慣も定着しつつあり、行動も落ち着いている児童が多い。家庭の協力もあって、準備もよくできて学習に臨む態度



がよい。学習指導に重点をおくことができた。○集会や授業で「話す力」「聞く力」が付いてきた。静かで落ち着いた雰囲気である。委員会活動でも話がよく分かるように絵などを用意し、言語活動に取り組んだ成果が表れてきている。また、自分たちもやればできるという自信も出てきている。

(4) 来年度以降の課題について

○長文を読んで意見をまとめる問題に無解答や誤答が多い。県学力診断テストにも表れていたが、国語では長文を読んで答える問題の誤答が多い。算数では、筆算に変える計算に誤答がある。単位の換算も難しい。計算練習の仕方を検討する必要がある。また、これからも読書タイムの充実を図り、長文を読みこなす意欲と力を付けなければならない。

○将来に夢がもてるよう、キャリア教育をさらに進め、いろいろな職業があることを知らせる。  
○小学校で芽生えた学習への意欲が中学校、高校へと進む間に衰退しないよう上級学校へ進学しても学習意欲が持続できるような取組をしていく。

○先進校視察や交流で得た情報を全体で共通

理解して具体的に進める必要がある。学年間の児童の実態に差があり、それは、家庭環境の違いでもあるが、教職員で協力し合い、どの学級も学習に向けて意欲的に取り組めるようにしていきたい。

## 取組事例⑤ 「自己肯定感と基礎学力の向上を目指した取組」

天理市立北中学校

### (1) 学校の状況について

本校は校区内3校の小中学校から進学する生徒を迎えるが、低い進学率に留まっている。また、学習に課題をもつ生徒の比率が比較的高く、全国学力・学習状況調査の結果などにも、基礎的・基本的な学力の不足がみられる。これは、「分かったという体験」の不足、自発的学習や新たな学習内容に取り組む上での抵抗感となっている。さらに、問題解決、課題克服に対しても自信がもてず、日常の様々な場面でも自己肯定感の弱さを示す言動も多い。生徒が能動的に学習活動に参加する意欲をいかに喚起するかが課題である。

### (2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

#### ①言葉の力を意識した取組

- ・聞くことを徹底させる指導
- ・的確な指示(言葉)とやり切るまで待つ教員の姿勢(「丁寧さ」「しつこさ」)
- ・言葉遣いや礼儀作法、マナーの指導
- ・当たり前のことでも「形に表す」指導
- ・9年前から「朝の読書」タイム(毎朝20分間)の実施



朝の読書風景



校内研修(学力づくり)

#### ②全校体制の「学力づくり」

中学校は教科担任制のため各教科の指導は教科に任されており、学級担任は生徒の生活背景を知っていても、個々の教科における学力の実態はつかみにくい傾向にある。また、学級担任が生徒の実態に応じて独自の学力づくりを進めることは、「なぜこのクラスだけ特別のことをするのか」など、不満を生む一方で、成果が見えにくく、生徒も教員も半ば諦めてしまう傾向もある。これらを払拭するためには、中学校においても教育課程の中に「学力づくり」を明確に位置付け、全校体制で取り組むことが成果を生み出すと考える。

本校における学力づくりはそれぞれの教科指導の根幹となる基礎的・基本的事項を確実に定着させる「基礎学力づくり」と小中学校学年以降からの発達課題となる抽象的思考(科学的思考)へと移行させるための「概念づくり」が本校生徒の課題と思われることから、これを同時に行うことが必要である。「基礎学力づくり」は、教科指導のみならず「朝の読書」や「学力向上タイム」など、学校・学年体制で取り組み、「概念づくり」は、各教科の基礎と基本を意識した意図的な語彙指導等の取組により、生徒の思考形態を具体的思考から抽象的思考(科学的思考)へと発展させることが期待される。

本校における学力づくりのための教育課程編成上のポイントは次の三つである。一つ目は、生徒の実態把握のために「基礎学力確認テスト」(国語・数学・社会)を定期的実施して生徒の実態を把握することである。このことにより担任がクラス生徒の実態(学力と生活)を把握でき、小学校時の学習実態も分かる。また結果は指導資料(教科指導)として生かす。二つ目は、生徒の発達段階を十分踏まえ、3年間の見通しをもった体系的・具体的な目標を設定することである。三つ目は、人格形成のためのキャリア教育(第1学年職業インタビュー・第2学年職場体験学習・第3学年進路講演会、高校出前授業)を通して生徒の自己肯定感を高め、学ぶことの意味をつかませることである。

#### ③学力向上タイムの実施

- ・学習意欲の喚起には、学習方法の具体的提示と成果が目に見えることが必須である。
- ・学力向上タイムは毎週1時間(月曜1限目)に全学年で実施する。学習理解のポイントとなる課題の解消と支援、発展的学習を行う。学年担当教員全員でクラス指導する。
- ・漢字力と計算力→生徒の自尊心の尊重と学習意欲の喚起
- ・中学校1週間の授業内容の復習とポイント確認(授業とのリンク)
- ・入試に直結した問題演習→能力の高い生徒にも対応できる(自学自習への発展を期待)
- ・定期テストへの出題

#### ④「心が動く」授業づくり

- ・授業規律の確立
- ・整理(ファイリング)の習慣付け
- ・言葉の意味を指導(語彙指導)し、概念化を図る授業
- ・成功体験の積み上げ…発達の最近接領域(ヴィゴツキー)に即した課題の工夫



[研究授業(少人数第3学年)]

- ・基礎と基本を意識した授業構成
- ・全教員による研究授業



【職員研修（生徒観察）】

### ⑤生徒の自己肯定感とモチベーションを高める機会の設定

- ・人格形成のためのキャリア教育
- ・第1学年「職業インタビュー」（仕事調べ＋職業講演会＋職業インタビュー）
- ・第2学年「1週間の職場体験学習」
- ・第3学年1学期7月「進路講演会」（講師：ハローワークジョブサポーター・高校教員）

2学期10月「高校説明会」（高校教員による出張高校説明会）

11月「高校教員による出前授業」

12月「先輩による進路講演会」本校卒業生（高校第3学年）

- ・総合的な学習の時間（全学年で実施）でも「ようこそ先輩」（講師は本校卒業生及び関係者の社会人・大学生）を実施している。



【進路講演会（高校教員）】



【高校出前授業】

### （3）成果について

#### ①指標1「指導方法の工夫改善」について

- ・生徒に届く言葉の力を意識した指導  
個々に応じた明確な言葉での指導や示範による継続的な指導により「分かりやすい授業づくり」の基盤ができた。

- ・授業規律の確立と整理能力の育成

声のみに留めず文字に示すことで、生徒のすべきことが明確になった。教員にとっても曖昧な点が解消され明確に指導できるようになった。また、テストやプリント類の保管指導をすることで、生徒の授業への取り掛かりが早くなり、予習復習の教材として活用しやすくなった。

- ・概念化を図る語彙指導

小学校漢字の習得は、中学校教科書の読解と理解に直接反映するという共通理解し、各教科の根幹となる語彙の指導を重点的に行った。概念を表す言葉の意味を重層的に理解させることで、文章の読解力や多面的に物事を考える力が少しずつ向上してきた。

- ・全教職員による研究授業

指導主事による指導を受け、教員が自分の授業を客観的に振り返ることができた。また高校担当の指導主事による指導を受けることで、小・中学校から高校へのつながりがよく分かった。生徒の実態を把握し適切な支援の在り方を考える（生徒観察）の研修を1学期に実施した

ことにより、教科を越えた授業の捉え方を教員間で共有することができた。指導方法の工夫改善には、教員の努力だけでなく、それを受け止める生徒の参加体制が重要なことが具体的事例の検討によって明らかになった。

#### ②指標2「学習意欲の向上」について

- ・成功体験の積み上げを図る課題設定

学習意欲を喚起し、それを自信と自己肯定感の向上につなげるために、学習方法の提示とその成果が見えるようにすることを中心に授業を構築した。特に重点化したのは教科の勉強方法をまとめた「北中版勉強ガイド」の作成と学力向上タイムである。これにより生徒の成功体験の積み上げが可能となり、授業に臨む姿勢や態度も集中度が増し、学習意欲の向上につながった。学力向上タイムは、それぞれの学年の実態に応じて教材を選定しているが、いずれもスモールステップを大切にポイントの整理と解法を具体的に示し、段階的に生徒の力を伸ばせるような問題を準備している。

- ・ビジョンを拓くキャリア教育

生徒の学習意欲を高めるには「学ぶ目的」をもたせることが重要である。生徒の発達段階を考慮した人格形成のためのキャリア教育（【第1学年】職業インタビュー、【第2学年】職場体験学習、【第3学年】三つの進路講演会・高校説明会・高校出前授業）を通して、中学卒業後の「生き方」「未来」を提示し、将来の姿を描かせることにより生徒の自己肯定感を高め、学ぶことの意味をつかませている。このことで「高校での学び」に対するイメージが鮮明になり、進路についての目標ができた生徒も多い。

### （4）来年度以降の課題について

#### ○一人一人の児童生徒の発達の実態を見据えた情報の共有（校区内校園との連携）

中学校単独の学力向上の取組には限界がある。中学校区の中で生徒は生活し成長していくという視点を持ち、生徒一人一人の背景や発達の実態を把握しながら、その課題解決に向けた支援をしていくことが学力向上への礎となる。そのためには校区内校園とこの視点を共有した共通理解と情報（事実）の共有（データの蓄積）が不可欠である。保幼小中そして高校へと成長していく子どもたちの発達における問題点や気づきを共有、継承していくことが求められる。連携の難しさを克服する手がかりとして、実社会で生きる学力の育成を目指した「学びの連続性」（眼前の子どもたちの将来像に思いを馳せること）を認識することを基盤にした教職員の信頼関係づくりを進めていきたい。